

文 献

- CAILLÈRE, S. and HÉNIN, S. (1961): *Sepiolite*, G. W. BROWN, ed., *The X-Ray Identification and crystal structures of clay minerals*. Min. Soc., London, Chap. VIII, P. 325—342.
- M. T. A. (1965): *Asbestos, Magnesite and Sepiolite Deposits of Turkey*. Publication of Mineral Research and Exploration Institute of Turkey, No. 121, P. 1—23.
- OTSUKA, R. MARIKO, T. und SAKAMOTO, T. (1973): *Mineralogische Eigenschaften vom Meerscham von Eskisehir,*

Türkei. Memoirs of the School of the Science and Engineering Waseda Univ., No. 37, P. 43—52.

- 下坂康哉・川野昌樹 (1969) : 韓国慶尚北道尚州産セピオライトについて 粘土科学 9巻 P. 10—18.
- 下坂康哉・川野昌樹・谷口 麟・市原祥次 (1973) : セピオライトの酸処理結果について (1) 粘土科学 13巻 P. 113—122.
- 下坂康哉・古賀 慎 (1975) : セピオライトの粘性について 須藤俊男教授退官記念論文集 P. 134—137.

(筆者は地質部)

地学と切手



フランス著名人
シリーズ中の
キュビエ切手

P. Q.

フランスでは 毎年著名なフランス人を題材として付加金付切手を発行している。1969年には6種発行されたが 5月17日にアンドレ・ジイドと共にキュビエのが発行された。ジョルジュ・キュビエ (Georges CUVIER 1769—1832) は 8月23日 ヴェルテンベル侯の領地であったモンベリアルで生れた。地質学史上では一般に天変地異説の主唱者として知られている。古生物学者だったが 生物学史上でも 脊椎動物の比較解剖学確立者の地位を保有している。

彼は幼時から博物学に対する興味を持っており ヴェルテンベルの学校で政治学を学んでいたが 彼の目的は博物学だった。彼の博物学の聖書は リンネの「自然のシステム」だった。19才で学校を卒業したが政府の職はなく 父の年金打ち切りのため 彼はノルマンディーで家庭教師となり その地の化石の研究をし 地方学会の書記になったが テシエに認められ 1975年26才でパンテン中央学校の教授に招かれパリへ行った。

1802年にはパリ大学比較解剖学の教授となり 1803年にはアカデミー科学部門の書記に選出され コレージュード・フランスの教授 フランス学士院会員 パリ大学総長となり死ぬまで名声と権威を保持した。彼は研究と調査をしながら定期印刷物を出版し 死亡会員への賛辞を書いたが ヴェルナーへの賛辞も1818年にキュビエが述べている。

パリに来た年に彼は象の化石をみつけた。それは現

存している象とは別の種類だった。パリ中はその話でもちきりとなったが それをはじめとして次々と過去の生物を掘り出した。マンモス 河馬 さい 熊 狼 彼はそれぞれの骨や破片の一部をみれば 目・属・種を見分けることが出来るほど比較解剖学に通じており 2～3片から生存中の様子を再現出来た。これらの動物の研究は否応なく彼を地質学に引きずり込んでいった。

彼の地質調査については ブロンニャール (Alexandre BRONGNIART 1770—1847) が協同研究者としてキュビエを指導した。「パリ周辺の鉱物学 地理学および有機的遺物の研究」(1811年) 「化石遺骸に関する研究」(1812年) はその結果である。これは白亜紀から沖積世までの調査であるが ある地方の地質を解明したというよりもはるかに偉大な仕事であり 古生物学における層序の原理を確立したもので 同様の仕事はイギリスで全く独立してスミス (William SMITH 1769—1839) によって行なわれていた。

彼の記載した化石は90%は現在相当するものがなかった。なぜ種と属さえも消えてしまったのか? なぜその後の堆積の中に別の種が現れるのか? キュビエは事実には忠実な研究態度を保つ人であったが この2つの質問に答えようとした時に その科学的方法は挫折してしまった。種や人類が進化したことを認めることは ユグノーの信仰では考えられないことだった。地層の考察と種の絶滅をみた上で 彼は古い生物は地球がこうむった一連の急激な天変地異の1つの時代に絶滅し 新しい生物が出現したのだと確信した。これが天変地異説あるいは激変説といわれているものである。これは同時代のラマルク (Jean Baptiste de LAMARCK 1744—1829) の生物進化や斉一説との論争となり 後年に後輩のライエル (Charles LYELL 1797—1875) から攻撃されることとなった。もっとも1828年にはライエルはキュビエを訪れ 滅多に入ることの出来なかった研究室に入ることを許されている。彼は1832年5月13日に死んだ。アカデミーは「キュビエの歴史は19世紀の科学の歴史にほかならない」と賛辞をささげた。